

ウイズ・コロナの時代「子どもにとっての遊び」（しまもと環境・未来ネット 2020 年度総会記念講演に変えて）



**ごあいさつ**  
子どものための地域文化環境の向上に努める NPO 法人北摂こども文化協会の理事長、川野麻衣子と申します。  
しまもと環境・未来ネット関係者の皆さま、はじめまして。今年の貴会の総会にて講演会を仰せつかっておりましたが、あいにくの新型コロナ感染拡大の事態に講演会が中止となり、代わりに本紙面を借りてお話をさせていただき運びとなりました。取り上げるテーマは「子どもにとっての遊び」です。読者様のお役に立てば幸いです。

### コロナ禍がもたらした被害

コロナによる感染予防のための対策が、子どもの育ちに悪影響を及ぼしていることが明るみに始まり始めています。  
「鬼ごっこで骨折も…コロナ休校、増える子供のけが」。これは 2020 年 8 月 19 日に発表された産経新聞の記事見出しです。  
緊急事態宣言が出され全国一斉休校となったこと。三密を避けるため屋外で気軽に群れて走り回って遊ぶことができなくなったこと。子どもたちが体を動かす機会が極端に減り、太陽に浴びる時間も減り、その結果、筋力・運動能力の低下がみられたり、骨の強度が弱くなってしまっているようです。登下校や遊びを含めた日常生活がいかに子どもたちの身体を育てていたのかを思い知らされます。



### 「遊び」は心身を育む行為

体を使って遊ぶことは身体を鍛えるだけではありません。友だち同士で遊ぶことによって、子どもたちは社会性を身に着けたり、集中力、創意工夫といった適応能力や発想力なども伸ばしています。  
子どもにとって、友だちと集って遊ぶことができないということは、体も心も成長・発達する機会が失われているということの意味します。  
コロナによる感染予防の状況下は、まさに子どもにとっての「緊急事態」です。

### 基本的人権の一つである「遊ぶ権利」

国連「子どもの権利条約」をご存知でしょうか。196 カ国の世界の大人が子どもたちに保障すると宣言した約束事です。「名前・国籍を持つ権利（第 7 条）」や「プライバシー・名誉は守られる権利（第 16 条）」などがあり、生命の維持存続に関わることから、自分らしく生きていくことに関わることまで、子どもに保障すべき基本的人権が定義されています。  
およそ 40 の権利が存在していますが、その中の一つに、「休息・余暇・文化・遊び」の権利があります。

**第 31 条**  
1. 締約国は、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める。  
2. 締約国は、児童が文化的及び芸術的な生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進するものとし、文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。  
(子どもの権利条約 1989 年国連採択 1994 年日本批准)

P1

### 遊びとは何か

この「子どもにとっての遊び」について、国連が 2014 年に公式の解説書を発行しました。その目的は、条約批准国に対して遊び等に対する正しい理解と環境整備を促すためです。  
警告された点は、遊びが「取るに足らないまたは非生産的な活動に費やされる『赤字』の時間」と捉えられており「遊びよりも、勉強または仕事に高い優先順位を与えるのが通例」とされてしまっている点、遊びと言っても「構造化・組織化された活動」が優先され、遊び本来の「自然発生的な」要素が重要視されず、「子どもたち自身が主導し、統制しかつ組み立てる振る舞い、活動またはプロセス」が大切にされていない点などです。  
遊びの本質的価値は「純粋にそこから得られる楽しみと喜び」であり、遊びとは「目的のための手段としてではなくそれ自体を目的として行われる」ものでなければなりません。

### 求められる環境づくり

子どもの遊びを保障しようとした時、上記の認識に加えて必要となるのが、子どもが自由に遊ぶことのできる物理的環境です。公園でのボール遊び禁止は、残念ながら今の世の中での当たり前になってしまいました。大声出してはしゃぐと騒音とされます。一昔前と異なり、現代では意図して積極的に子どもたちが自由に遊ぶことのできる時間・空間を用意しなくてはならないと、子どもは伸び伸びと遊ぶことができないのです。

### プレイパーク（冒険遊び場）

そこでご紹介したいのが「プレイパーク」です。「冒険遊び場」とも呼ばれます。  
起源はコペンハーゲンに創設された「廃材」遊び場です。禁止事項の多い都市公園に対して、子どもたちが本当に遊ぶことのできる公園（遊ぶ＝プレイ、公園＝パーク）を目指して作られた子どものための公園です。プレイパークでは子どもたちが自由に使える資材やがらくたが雑然と置いてあり、地面に穴を掘ったり火を使ったりすることも許されます。子どもたちが自分たちの裁量で自由に挑戦できる世界を目指して「冒険遊び場」とも呼びます。

### 現代プレイパーク事情

日本で初めての常設型プレイパークが誕生したのは 1979 年です。羽根木公園の中に開設され今でも遊ぶことができます。  
NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会が公表した全国調査の最新データによると、2016 年現在、日本のプレイパークは全国約 400 箇所を数えます。  
行政の協働・協力を得て、都市公園・児童遊園の一角で月 1～数回定期開催する形態が多いようです。

### 事例紹介「ひと山まるごとプレイパーク」

筆者が代表を務める NPO 法人北摂こども文化協会もプレイパークを運営しています。個人有志の方のご協力を得て、民間私有地の里山を会場に、月 1 回の定期開催をしています。  
一つの山をまるごとつかって遊びほうけようという主旨で事業名を「ひと山まるごとプレイパーク」と決めました。通称「ひと山」です。  
2001 年から開始し今年で 20 年目を重ねます。参加者の子どもとその保護者である大人、運営スタッフ、子どもと大人世代をつなぐ若者ボランティア、子どもたちに山ならではの遊びができるように技術的サポートをしてくれるシニアボランティア、以上幼児から 80 代近くの大人まで一緒になって過ごします。

### ひと山



### ひと山の 1 日

午前 10 時の朝の集いから始まります。今日来た人が誰か、みんなで輪になって顔を見合わせ、名前を呼ばれたら返事をします。月 1 回しか集まれないので、お互いを知る機会を設けています。点呼の後、やりたいことを出し合います。「今日、なにやろうかと思ってきたー？」一度参加したことある子や発想力豊かな子が声を上げてくれます。出てくるアイデア

P2

は虫捕り、カニ川遊び、秘密基地作り、探検、冒険などです。  
ひと山は子どもたちが自由な発想で好きに遊ぶことを大切にしています。しかし初参加の子や経験の少ない子などの中には、ひと山でどんな遊びができるのかわからず、何をして遊べば良いか発想が浮かばないこともあります。そのため考えた工夫が発表の場です。  
アイデアのある子がその場に集うみんなに自分のアイデアを共有します。他の子のやりたい遊びを聞いた子どもたちは、「そんな遊びもあるねん！」、「私もやってみたい！」とイメージが膨らんだり、興味を持ちます。そこからは若者ボランティアの番です。「虫捕り行きたい人～、一緒に行こうー！！」朝の集いで出たいいくつかの遊びに、「この指止まれ」方式で、興味を持った子どもたちが集って遊び始めることができるように、子どもたちを誘います。  
朝の集いの後、「やりたいこと」を接着剤に参加者の子どもと大人が少人数のグループになって、ひと山のフィールドのあちこちに分け入り、好きなことをして遊びます。  
お昼になると再度、広場に集合。点呼を取って安否確認をすればお昼ご飯です。各自持参のお弁当と、炊き出しの汁物一品をいただきます。参加者みんなで食べる様子はまるで大家族です。午前中にどんなことをして遊んだか、山の中で採集した物の紹介など、情報交換も行います。それらの情報をもとに、午後からの遊びがさらに活気づきます。  
午後 2 時まで遊び、野外調理による手作りおやつを食べたら、終わりの会です。  
終わりの会ではまず今日何をして遊んだか報告したり、作ったものを紹介し合ったりします。そして来月やりたいことを出し合います。その後、みんなで片付けしたら解散です。

### 朝の集いと終わりの会

朝の集いと終わりの会があるプレイパークは珍しいかもしれません。集会の目的は 3 つあります。  
一つ目が、子どもたち同士で刺激し合うことです。そんな遊びがあったのが、私もやりたいわと、刺さることで想像を膨らまし子ども自身が可能性を広げていくことを大切にしています。魅力的な遊びプログラムはいくらでも用意できるのですが、あえてプログラム化しないことで、「本来の遊び」がもつ「自然発生的な」要素が失われてしまわないように気を付けています。  
二つ目が、子どもたちの自己肯定感の向上です。人前で発表することは勇気のあることです。それゆえにみんなの前で自分の考えを伝え、聞いてもらえたという体験が、子どもたちの自信につながればと願っています。  
三つ目が、ひと山に集った参加者全員の一体感を育むことです。自分の好きなことを、参加者はただひと山を利用しているバラバラの個人と違ってしまいます。そこで、それぞれで遊んだとしても、同じ時に同じ場を共有する「仲間」という意識が育まれるように「想いや思い出を分かち合う機会」を作りました。「自分はこんなことを楽しかったよ。あなたは何してた？」、「それすごいね！来月私もやろうー！！」想いや思い出がつながって、次なる遊びへと発展します。



### 居場所となる遊び場

子どもの遊び場に一体感が必要なのかという疑問があってもおかしくないですね。  
実は、ひと山は単なる遊び場のみならず、参加者と共に過ごすみんなの居場所となることも目指しています。居場所というのは安心して過ごすことができ、自分らしく居ることができる空間のことです。そう居られるために不可欠となるのが、あるがままの自分をだせる人間関係です。

指導や教育ではなく寄り添い共感することあるがままの自分を受け止めてもらえる体験の積み重ねが、ひと山という空間、そこに集う人々への安心感、信頼を生み出します。そのためにスタッフが心がけていることが、一人ひとりの子どもに寄り添い、その子の興味関心に共感することです。スタッフやボランティアが、親でも先生でもない即ち、教え指導する立場ではないちょっと変わった大人、あるいは、お兄さん・お姉さんの存在としてかかわることで、子どもたちの心を解放します。

P3

### 自然の中での遊び

心の解放に多大なる影響を与えているもう一つの要素が、自然環境です。大空の下、大地を踏みしめ、樹木の香りに包まれ、太陽の暑さや風の爽やかさなどを感じながら過ごす、五感が自動的にフル稼働します。目にするもの、手に触れるもの、耳にする音、すべてが不思議にあふれています。  
思考は後、感覚が優先され、遊びに集中していきます。  
かつての参加者に聞き取りしてみると、自然ならではの遊びを満喫していたことが確認できました。  
商品化された想定内のプログラムでは得られなかった体験に違いありません。



- 探検とか、行ったことのないところを見つけに行ったりして、新しい場所とかみつけたりしたのが結構楽しかったかも。山を下ってみたら、川あるやんってみたいな感じだった……で、そのまますすぐ行ったら……つながって～って発見が面白かったと思う。
- 思い出は雪合戦とかそりすべり。冬にしか、しかもうまくいかないと積もらない。そういう時にしかできない遊びを全員でやるのが面白かった。
- 施設の遊びやつたあつたこと限られるけど、自然の中やつたら自分たちで思いつけば思いつくほどできるし。どんどん遊び方が広がっていくし、多分どっかの建物内やつたら、やることないかなってなりそうなのがする。

### 家族・故郷のような場所

今年で 20 年目を迎えるひと山です。関係者の中には、幼少期に参加し、部活や受験で一時的活動を卒業した後、学生や社会人になってから若者ボランティアとして立場を変えてひと山に戻ってくる「かつての子ども（参加者）」もいます。  
そんな若者が語ってくれる言葉が「ひと山は第二の家族」、「私にとってのふるさと」です。主催者としてこれほど胸を打たれる出来事はありません。

### 在り続けることの大切さ

かつての子どもが、今の子どもの育ちを支えるためにボランティアとして戻ってくる。そしてボランティアをする若者自身もまた、ひと山という社会活動を通じて、人として市民として成長していく。  
ひと山では、育ち・育て合う人間の営みが循環しています。  
「久しぶりやん、大きくなったな」、「どうしてたん、今どうしてるの」と久しぶりに訪れる仲間を迎え入れることができる場があるということはいかに豊かなことでしょう。

### 日本社会の未来に向けて

貴会の拠点である島本町にも自然豊かな公的空間があると聞いております。未来を創る今の子どもたちのために、ぜひ豊かな自然・遊び・人間環境を整備、保障してあげてください。貴会をはじめ島本町の益々のご発展をお祈り申し上げます。

### あとがき

しまもと環境・未来ネットの活動もコロナ禍の影響で、三密を回避する目的で講演会など自粛しています。唯一、川美化推進活動は三密と猛暑をさけて活動を継続しています。不法投棄などは住民の意識に負う所が大きいので、啓発ポスターを作成、掲示しています。成果？（収集したゴミの写真）を全面掲示してアピールしています。川野さんの著書「ひと山まるごとプレイパーク」（萌文社）を読むと、現在行っておられる「ひと山」は一朝一夕には出来ていないのがわかります。山だけがあってもダメ、やる人がいても山がないと出来ない、用材の供給場所としての山が不振ないま、志のある人が島本の山を子ども達の賑やかな声で満たしてほしいところです。 T.Y

P4